

## &lt;学会レポート&gt;

## 第13回医療の質・安全学会学術集会

2018年11月24日～25日 於 名古屋国際会議場

旗手 俊彦（札幌医科大学）

第13回医療の質・安全学会のテーマは、「クリニカル・ガバナンスの確立を目指して－質・安全学を基軸とする医療への移行－」であった。このテーマに直結する特別講演として、上田裕一氏（独立行政法人奈良県立病院機構理事長）による「医療施設のガバナンスには何が必要か－英国 NHS のクリニカル・ガバナンスに学ぶ－」と題する講演がなされた。この講演は、英国 NHS の歴史と取組を非常に明快に説明するものであり、それによれば、クリニカル・ガバナンスとは、「NHS の組織が、医療サービスの質を継続的に向上させ、医療ケアの優秀さを育む環境を作り出すことによって、高水準のケアを守る責任を担う枠組み」（抄録集140頁）のことである。日本でも、次世代医療基盤法が施行され、いわゆるビッグデータを健康・医療に関する政策や研究に活用する段階を迎えているが、その政策や研究の目指すべきところ、また手法に関して、NHS のクリニカル・ガバナンスの取り組みは非常に示唆的といえよう。

また、今回第13回の学術集会は、本学会が発足して以来初めて首都圏を離れての開催となった。その開催地である名古屋は、いわずと知れた日本のモノづくり産業の拠点であり、その開催地の特色を活かした特別講演として、古谷健夫氏（トヨタ自動車株式会社業務品質改善部主査）による「トヨタが学んできた品質管理を医療に役立てる」がなされた。その中では、トヨタの取り組む TQM（Total Quality Management）の目標が、「お客様第一」、「全員参加」、「絶え間ない改善」の3つにあると紹介されたことは、そのまま医療にあてはまるものとして捉えることができよう。医療の質と安全に関する院内の取り組みに、参加していない医療スタッフのいる施設は果たしてゼロといえるであろうか。この講演は、自らを振り返るきっかけも与えてくれた有意義な内容であった。また、名古屋大学医学部附属病院とトヨタが共同で取り組んでいる ASUISHI プロジェクトも紹介され、トヨタの取り組みを医療の質改善に応用するメソッドにつき研究開発中とのことであり、その成果の一日も早い発表が待たれる。

また、第13回学術集会では、これに先立つ2018年4月13日～14日に東京で開催された「第3回閣僚級世界患者安全サミット」の概要報告がなされるとともに、海外招聘講演も、Mayer Barbara 氏らによる“The Fall Prevention Journey: Yesterday, Today and Tomorrow”、Kenta Uematsu 氏による「米国での多職種医療安全チーム」の二つが用意され、これまでにない国際水準を意識した集会であったことが今回の大きな特徴といえよう。

もちろん、以上の第13回学術集会を特徴づける講演等のほか、患者・家族の参加による医療安全の推進方法や医薬品・医療機器に関する安全管理、また、特にここ数年報道で大きく取り上げられた診療情報の見落とし・共有不足に関する個別のセッションも多く開催され、国際レベルから日常レベル、地域レベルに至るまであらゆる医療施設にとって有益な学術集会であったと評す

ることができる。

次回第14回学術集会は、2019年11月29日（金）～30日（土）に国立京都国際会館で「レジリエンスの探求～つながり、共創、イノベーション～」というテーマの下に開催される予定である。医療の質と安全に関わる医療スタッフはもちろんのこと、その研究・教育に関わる者にとっても有意義な学術集会になることは間違いなく、医療の質と安全に関心を抱く多くの諸兄姉の参加を期待したい。